馬琴書翰集成 全七巻

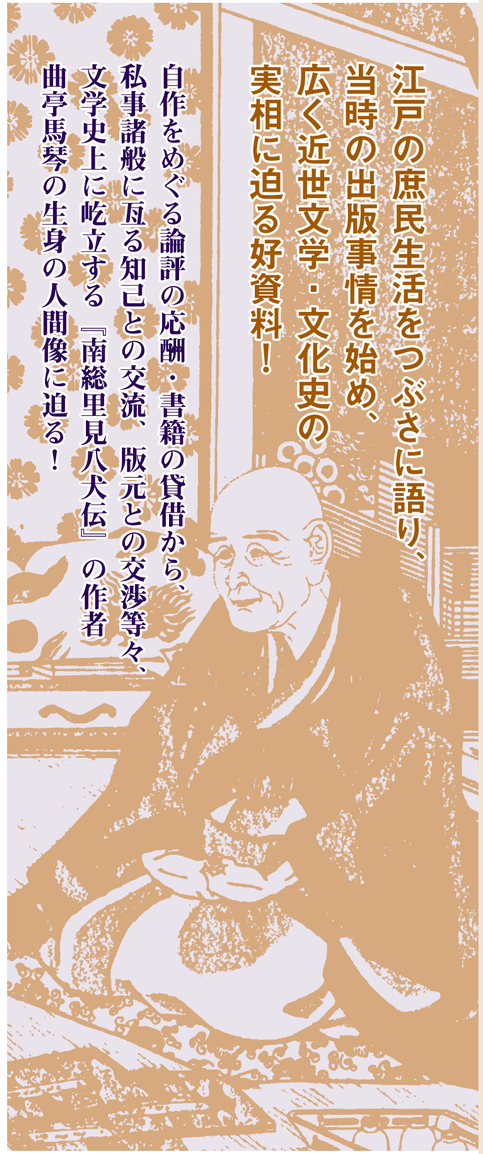
本篇六巻・別巻

柴田光彦
神田正行 編

馬琴書翰の全貌を集大成！　未発表十余通を含む
四百余通を翻刻して年代順に配列、他に来翰約百通を収録

内容見本

八木書店



江戸の庶民生活をつぶさに語り、
当時の出版事情を始め、
広く近世文学・文化史の
実相に迫る好資料！

自作をめぐる論評の応酬・書籍の貸借から、私事諸般に亙る知己との交流、版元との交渉等々、文学史上に屹立する『南総里見八犬伝』の作者曲亭馬琴の生身の人間像に迫る！

刊行にあたって

元跡見学園女子大学教授
東京国立博物館客員研究員　柴田光彦
日本学術振興会特別研究員　神田正行

曲亭馬琴、滝沢解の書翰の長文で、またその大量であることも著名である。明治以来諸家により折々に紹介されてきたが、その全容が明らかになるには長い歳月を必要とした。

纒まったものとしては竹清・三村清三郎により堀内快堂所蔵の馬琴の盟友伊勢松阪殿村篠斎宛のもの三十余通を『曲亭書簡集』として一〇〇部限定のもとに刊行されたのを嚆矢とする。原本は大正の震災により烏有に帰したが、また『藝林叢書』第九巻中に「曲亭書簡拾遺」を加え、さらに「曲亭書状写」「寄曲亭書簡」が収録された。

国立国会図書館は馬琴書翰一〇八通を所蔵、小林花子氏によって「上野図書館紀要」に発表、また同館の『貴重書解題』に収録された。天理図書館は、西荘文庫・小津桂窓宛の書状を中心に一七九通の大部を蔵し、木村三四吾氏により館報「ビブリア」に紹介され、氏の著作集にも収録、書翰中の主なるものは『天理図書館善本叢書　馬琴書翰集　影印篇』、全書翰は『飜刻篇』に発表され、牧之記念館蔵のものは『鈴木牧之資料集』、『鈴木牧之全集』に収められた。早稲田大学図書館は版元河内屋茂兵衛宛のものを主に蔵しているが、柴田により『紀要別冊』に日記との対照のもとに紹介した。京都大学文学部には藤井乙男氏の書写本が蔵され、その一部は紹介されていた。その後原本の大部分が三都古典会に出、日本大学総合図書館の蔵となった。また木村氏により京大本の飜刻が私家版によってなされ、やがて日大本も大澤美夫氏に柴田と高木元氏とが加わり刊行された。

広く近世文学・文化史研究の基礎資料となる馬琴書翰の集大成は、昭和四十八年の『馬琴日記』刊行に続いて出す予定で企画されたが、諸般の事情から実現に至らず、日記編者の内、一番若年の柴田に課題として残されていた。この度、新たな共編者神田とともに若干の未発表書翰と既知の来翰全てを加えて、先賢の業績を礎とした宿願の出版企画実現に至った。幾らかでも斯界に裨益することあらばと願う次第である。

本集成の特色

- **馬琴書翰の全貌を網羅集大成**　従来未紹介であった十余通を加え、現在知られる限りの書翰四百余通の翻刻を年代順に配列、併せて馬琴宛来翰約百通を収録。
- **利用の便が格段に向上**　従来主に所蔵機関単位で公刊・紹介されてきた書翰を、年代順配列することにより、編年資料としての総覧が可能となった。
- **文人諸家との交流**　馬琴宛来翰を併録することによって、書翰による同時代文人との交流が一望できる。
- **正確な翻刻本文**　既紹介の書翰についても、可能な限り原翰もしくはその複製にあたり、正確を期した。
- **江戸の庶民生活を知る好資料**　日記では淡々と箇条書きに記されている日常生活の機微を、盟友の篠斎や桂窓には書翰で詳細に吐露。衣食住をはじめ江戸の主要な出来事、地方の風聞など、生活者の視点から、その実相を垣間見ることが出来る。
- **近世出版事情の詳細記録**　前条と同じく、日記の箇条書きのみでは知り得ぬ、執筆から絵師、筆工、整版、校正の過程、江戸と上方の版元間のやりとり、版本の発行部数・実売部数、入用の唐本など執筆資料入手の苦心等々、当時の出版事情を具体的に知りえる。
- **便利な別巻**　最終配本の別巻には書翰内容細目一覧・索引の収録を予定し、本篇活用の利便を図った。

馬琴書翰集成

全七巻
本篇六巻・別巻

ISBN4-8406-9650-0（全七巻セット）

二〇〇二年九月刊行開始！
定期予約募集！

【各巻収録予定】

第一巻　寛政頃～天保元年
第二巻　天保二年～天保三年
第三巻　天保四年～天保五年
第四巻　天保六年～天保八年
第五巻　天保九年～天保十二年
第六巻　天保十三年～嘉永元年・附録・来翰
別巻　書翰内容細目一覧／索引

＊配本予定／三ヶ月毎配本
〔第1回配本／02年9月17日〕
〔第2回配本／02年12月16日〕
〔第3回配本／03年3月17日〕
〔第4回配本／03年6月16日〕
〔第5回配本／03年9月16日〕
〔第6回配本／03年12月15日〕
〔第7回配本／04年3月15日〕

【ご購入の案内】

- A5判／上製本／カバー装／平均三五〇頁
- 各巻本体予価　九、八〇〇円　＊消費税を別途お預りします。
- ご注文は最寄りの書店、または同封ハガキにて小社へお申し込み下さい。

※尚、本集成は分売いたしません。全七巻セットにてお申し込み下さい。

【関連書のご案内】

木村三四吾著作集

A5判上製／平均四九四頁

Ⅰ 俳書の変遷 ―西鶴と芭蕉
古俳書から子規に至るまで、書誌学の成果を結実　九、八〇〇円

Ⅱ 滝沢馬琴 ―人と書翰
徹底した書翰読解により、生身の人間馬琴に迫る　九、八〇〇円

Ⅲ 書物散策 ―近世版本考
本好き必見！　書物の肝所をおさえた至言の数々　九、八〇〇円

Ⅳ 藝文余韻 ―江戸の書物
【資料篇】「後の為の記」翻刻ほか本篇活用に必備　一二、〇〇〇円

木村三四吾私家版

後の為の記【影印】　A5・三二四頁・七、五〇〇円
馬琴が亡き息子興継の哀悼録として、その行状・詩稿を纒めた書

路女日記【翻刻】　A5・五〇〇頁・九、八〇〇円
馬琴失明後の口述筆記を担当していた嫁・路による馬琴没後の日記

京大本 馬琴書簡集【翻刻】
殿村篠斎宛書翰写し三十三通を収録　A5・二一二頁・四、五〇〇円

日本大学 総合図書館蔵 馬琴書翰集【翻刻】
大澤美夫・柴田光彦・高木元編校　B6・二九〇頁・六、七九六円

発行　八木書店　出版部
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8 ●TEL：03-3291-2961（営業）
03-3291-2969（編集）FAX：03-3291-2962 ●E-mail：pub@books-yagi.co.jp
●Web：http://www.books-yagi.co.jp/pub　オンライン書店など情報満載

取扱店

内容見本表紙の図版：馬琴肖像（天理図書館蔵『八犬伝』最終回の口絵より）

2002.7.20000.jp

日記・手紙の最も面白い作家

大阪樟蔭女子大学名誉教授
元天理図書館司書研究員
木村三四吾

八木書店作成の馬琴書翰所在リストによれば、私の曾ての勤務先天理図書館蔵のが最も多数の様であった。その殆どが伊勢松坂の豪家小津桂窓家に伝来した、同人宛のものである。小津家は日本古代学者本居宣長にも近く、本来学問好きで、同家の蔵書は質量ともに相当なものであった。書翰の内容は、家事に係ることも多少はあったが、当時日本第一の評判作家滝沢馬琴の編著類のことが多数をしめていた。書物を通じて、相識関係にあった小津・滝沢の両家は書物をなかにして、本の売買に関する金銭関係のものがその殆どである。元来金銭に所縁の遠い馬琴は自作の著作物を以てそれに充てることも多かった。例えば、馬琴の代表作『里見八犬伝』の初版初刷の刷下ろし本、百八冊が揃って小津家にあった。

馬琴書翰自筆本の現存するところは、天理以外国会図書館・早稲田大学など幾つも存在し、書翰リストには、又、自筆本以外にも既に編集出刊された諸本のほか、原本不明のものがかなりある様だ。馬琴は日記・手紙の最も面白い作家であるが、その書翰の解読難度も私の経験では大変なものであった。天理本馬琴書翰の解読に何年か熱中したが今猶自信がない。それらは今次編者によって、立派に解読されることと信ずる。又、原本不明で既刊の書物によるしか方法のないものは、それとして亦致し方もあるまい。兎も角馬琴書翰集は以上の原本と刊行本の両種によらざるを得ないと考える。今回の八木書店発行本はこの最良の方法によったもので、爰に至って馬琴書翰の総集は初めて出現するというべく、その功績は馬琴学にとって極大なものと謂って支障はあるまい。

推薦のことば

自作の秘鍵と生活者の素顔

福岡大学教授
中野三敏

古典を読む意義は多様である。内容の面白さだけで十分とする立場もあろうが、更に踏込んで、善かれ悪しかれその作者の人間性に触れ、理解し得た時、それは十全なものとなるのではなかろうか。何れにせよその為の最適の材料が作者の手紙というものであるのは、何がしかでもそこに心がけた人ならば、誰しも異論はない筈である。

但し、同じく文人・作家とはいえ、やはり人さまざま。手紙となると途端に千編一律、何の変哲も無くなる人もあり、一方、芭蕉・蕪村・頼山陽など、布置結構、殆んど期待に背かぬ書き手もある。馬琴の場合、その後者の最たる者である事は、今更喋々する必要など全くない。しかも篠斎・桂窓といった特定の相手に対した場合、自作の趣向や鑑賞の秘鍵を倦むことなく語り続けて、立派に一篇の文芸評論ともいうべく、又、丁半や河茂といった本屋に対しては、作家という生活者の素顔を憶面もなくのぞかせて興味は尽きない。

但し、若干でもその原翰の解読を試みた者ならば嫌という程思い知らされるのが、その読み難さである。従来、数少ない馬琴読みの名手達によって相応の成果は上っていたものの、今回は名実ともに第一人者ともいうべき柴田氏の眼力が、現存四百余通の凡てにわたって及ぼされるという。全部を一眼に見渡すことの重要性は、論じ始めれば数百言を費やすことになろう。今はたゞ質量ともに文句のつけようのない決定版の出現を、心から欣びたい。

馬琴をめぐる人々

—書翰宛名人と来翰差出人—

殿村篠斎（一七七九—一八四七）伊勢松阪の人。江戸店持の豪家で国学者として宣長の門人。馬琴の読本の愛好家で『犬戎評判記』を著す外、『八犬伝篠斎評』などあり、『犬猿戯筆』二十数冊を伝えたというが、明治二十六年の大火で多くの馬琴書翰とともに消失。既知の書翰は約一七〇通。

小津桂窓（一八〇四八—一八五八）伊勢松阪の人。本居春庭に師事。詩文・和歌に長じた。馬琴との交流は篠斎より遅れるが、馬琴の作品の評答もあり、晩年の馬琴をよく支えた。蔵書家「西荘文庫」主人として知られ、書翰は現存最多の約一三〇通が伝わる。

木村黙老（一七七四—一八五六）高松藩、江戸家老・国家老。馬琴の愛読者で三知友の一人。著作の評答あり、馬琴の随筆により『閒まゝの記』の編著や、『戯作者考補遺』などがあるが、書翰の残存の少ないのが惜しまれる。

鈴木牧之（一七七〇—一八四二）越後塩沢の人。『北越雪譜』出版のことから縁あるも、この件はのち山東京山に移る。

馬琴書翰の宛名人　安積屋喜久次・石井夏海・大郷信斎・大場大助・小津桂窓・歌川豊清・木村黙老・黒沢翁麿・小泉善之助・近藤重蔵・鈴木牧之・河内屋茂兵衛・山東京伝・只野真葛・丁子屋平兵衛・殿村篠斎・中神守時・林宇太夫・屋代弘賢・山崎美成・雪松慈平・吉岡文篁・樸亭琴魚など。

馬琴宛来翰の差出人　浅草庵市人・芦辺田鶴丸・石川大浪・今大路孤雲・歌川豊国・歌川豊広・大田南畝・葛飾北斎・亀田鵬斎・亀田綾瀬・奇々羅金鶏・北尾蕙斎・狂歌堂真顔・窪俊満・越谷吾山・小柴長雄・佐野文介・山東京山・式亭三馬・清水正徳・鈴木有年・鈴木牧之・田辺主計・俵屋宗理・蔦唐丸・角鹿清蔵・頭光・殿村篠斎・中村仏庵・西原梭江・橋本経亮・墨川亭雪麻呂・茂木巽・屋代弘賢・山原佳木・山本宗英・山本緑陰・蘭奢亭馨・渡辺崋山など。

日記では窺い得ない心情を吐露 —馬琴の日記と書翰—

馬琴が早くから家の記録として日記をつけていたことは、残された日記に「古日記」を見る記事があることからも知られるが、没後に残された日記は多く東京帝国大学の蔵するところとなっていた。惜しいことに大正の関東大震災で天保五年の一年分を残して消失、それ以前に和田万吉の書写していた天保二年分、別に饗庭篁村が僅かながら抄録した文政九年から弘化三年までの十八年間、一方早稲田大学蔵の文政十一・天保三・同四年分、その後天理図書館が文政十・十二年分を入手、また最後になって岐阜市円徳寺に、馬琴没年の嘉永元年日記、長男宗伯の未亡人お路や孫の太郎の記したものが現れ、中央公論社より故暉峻康隆氏を代表として公刊された。それに続くものがお路の日記であり、滝沢家より天理図書館に寄託されてあったものを木村三四吾氏の永年の努力により少部数私家版で刊行された。近年八木書店から発売されて多くの人の入手しうることになり喜ばしい限りである。

馬琴の日記は日々の記録として詳細ながら、その心情は記されておらず、近辺に語り合う友人は持たなかったようであり、それは書翰によってのみ知りうることが出来る。ここに書翰ならではの独自の特徴があり、日記と併せることで資料としての有用性が相乗的に高まる所以がある。

馬琴の最も親しい知己に、伊勢松阪の殿村篠斎・小津桂窓があげられる。ともに遠隔の地にあり、長文の書状が交わされている。篠斎宛の書翰は早くから知られていたが、それに次ぐ桂窓宛のものは現存最多のもので天理図書館に蔵され、その成果は『木村三四吾著作集』に凝縮され、「天理図書館善本叢書」『馬琴書翰集 飜刻篇』で完結する。

馬琴書翰の大部分は既発表のものながら、この度一括年次順の総括編集により、通観することを目的に、識者の検索考証の煩瑣な手続きを省き得れば幸いと願う次第である。

（柴田光彦）

本文組見本（A5判二段組）

1 〔寛政～享和〕3月5日　牧之宛

1 〔寛政～享和〕三月五日　牧之宛

朶雲薫誦仕候。春暖相催候処、倍御荘栄被成御座、奉恐喜候。陳バ、御別紙手鑑一葉、相認候様被仰下、委細承知、則任命、愚詠染筆仕候。御一笑可被下候。且亦、愚名入すり物儀被仰下、御心易義ニ御座候へ共、及晩春、もはや手前ニ払底ニ御座候。依之、友人よりもらひ置候手すり、少々呈上仕候。愚詠すりもの、かハり、短冊二葉御進上仕候。

右御答迄、早々如此御座候。恐惶謹言

三月五日　　馬琴拝

牧之雅君

座下

尚々、御歳旦御秀吟御見せ被成、いづれも甘吟。

就中、春興二句、

陽炎や——

梅が、にたが——

右、別而おもしろく覚申候。

一、友人京伝方へハ、毎度御懇書被遣候よし。御風流之御事、折々御噂申出候義ニ御座候。小子も貴国雪中のおもむき、くハしく承知仕度、かねて志願ニ御座候。著述之一助ニも相成申候事ニ付、いつそ御閑暇之節、折々御筆談被下度奉存候。小子、両三年已前より、『俳諧節用抄』と申著述ニ取かゝ

て、一向埒明ニ

及確執候ニ付

昨冬十一月比

もなき仁ニほ

り崩し、一向

柳川ハ、当春

画も出来不申

絵ハ早速出来

も甚しくほり

付候へども、

悴も多用故、

も、板木師、

ミに日ヲ費し

日　篠斎宛

23　文政六年正月九日　篠斎宛

（端裏書「正月九日出」）

以別紙啓上仕候。旧臘は度々之大雪にて、近年ニ不覚盛寒、寔ニ凌かね候。御地も御同様と奉察候。寒過候而、立春比より南風ニて、昨今は俄ニ暖気ニ御座候。天道人を不殺、老人之得意、尤歓入申候。さて『八犬伝』出板、段々及延引、定而御待かねと被存候。かねて申上候通り、板元は大慾の仁ニて、一昨年九月比より、大山事ニとりかゝり、身上ヲ粉に篩候処、その山はづれ候ニ付、去秋中より漸『八犬伝』出板の催し有